慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	R・ケブナー アダム・スミスと産業革命
Sub Title	R. Koebner, "Adam Smith and the industrial revolution"
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.1 (1960. 1) ,p.110(110)- 114(114)
JaLC DOI	10.14991/001.19600101-0110
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600101-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

R・ケブナー

『アダム・スミスと産業革命』

R. Koebner, "Adam Smith and the Industrial Revolution," Economic History Review, 2nd. Series Vol. XI, No. 3, 1959, pp. 381-391.

一

スミスが国富論の初版を刊行したのは、産業革命と呼ばれるほどの変革がようやく開始をみようとした時期であった。しかし彼が第三版のための増補を企てた時期には、新しい技術が本格的に実用化されていた。産業家の盛んな進出をみよ。彼はこの事実をよく知っていた。日常の体験から立論のための材料を引出そうとするスミスであれば、当然かかる発展について言及し、何かまとまった見解が述べられてしかるべきであろう。

しかし国富論には現実に進行しつつあった革命についてふれた箇処がない。もしあっても、附随的で、問題の核心にまで立入らない。どちらかといえば、彼は、産業家の示した活躍と積極的に取組もうとしなかった。製鉄業者・紡績工場主・運河建設業者のもとで進行した技術革新に彼はふれない。スミスのこの態度をどう説明したらよいか。彼がめざしたのは経済行為の原則を追跡することで、個々の事例について意見を述べる必要がなかったというのでは説明

にならないであろう。とすれば、この段階で産業家はいまだ少数で、決定的な力にまで成長していなかったとみたためか。それにしても新しい制度はすでに支配的な体制になろうとしており、彼にはそれがはっきりわかっていたはずである。にもかかわらず、積極的な論評を避けたのは、いかなる事情によってであろうか。

理由は、スミスが国富論を書いた決定的な動機を考えれば、はっきりするであろう。実の狙いは、周知の如く、重商主義の批判にあった。重商体制を、彼は排除すべきものと断定した。従って彼における最大の関心事は、その維持・強化を願う商人・親方製造業者の行動にあった。いきおいスミスにおいて、産業家をめぐる問題は後退せざるを得ない。決して忘れられたというのではない。ただ重商主義批判が、産業家をめぐる問題を議論のそとに締出すほどに緊急な課題として、彼には感じられたためである。こう説明した限りにおいてのみ、問題の正しい解決となるのではなかろうか。

以上が、ここで取上げた小論の大要といっていい。議論の過程で、二つの問題が提起されている。いずれも、スミスをどう理解するかにつながる重要な問題であった。

一つは、スミスが産業家をめぐる問題を議論から締出したということ自体に関連してである。彼のこの態度にどれほどの意味を与うべきか。通説にならい、スミスが工業主義を擁護しない証拠とみていいか。どういうものであろうか。他は、重商主義の評価の問題である。スミスは重商体制を当面緊急の課題として取上げ、排除すべきものとしているが、いかなる理由からか。とりわけスミスにおいて重商主義は、産業家をめぐる問題を議論の片隅に追いやるほどの問題と考えられた。そういった感じ方は彼のどこから来るのであろうか。

二

産業家をめぐる問題はスミスにおいて前面に出て来ない。彼が技術の進歩を論ずる場合も、産業家のもとで進行した事態が念頭にあったわけではない。コートの精錬法すら忘れた。そういわなければならない論拠はどこにあるか。スミスの論点をどう整理できるか。

第二編の第二章で彼は固定資本に投下される支出について論ずる。機械学上の改良で、従来よりも安価で簡単な機械が利用されるようになれば、それだけ費用が節減でき、その分が、労働者によって加工される原料をより多く購入するため投入されるので、仕事の量が増し、便宜も増加しようから、あらゆる改良はつねに有益である。スミスはこう論じた。

彼のいう如く、固定資本に向うべき支出を削減できるほどの改良があれば、いかなる部門においてであったか。しかしそれほどの改良は、スミスがこれを書いた当時、現実にイギリスで起っていない。より安価な機械でより高い生産が可能な製鉄所・紡績工場は存在しなかった。産業家はいまだそれほどの改良を果していない。経済史の成果をみれば、その点ははっきりする。とすれば、彼のこの記述は、各地に長く続いた体験を基礎としたものといわなければならないのではないか。現に彼はいかなる社会においてもといい、イギリスに問題を限らない。立論のための基礎をひろく社会一般に求めるのである。

また彼は第二編の第三章で、労働を容易にし省略する機械を増加し改良することを目的に追加資本が投下されれば、労働者の生産力はそれだけ上昇するという。しかも彼によれば、このことは、土地や労働の年々の生産物を増加することに成功して、それだけ資本が増大し、機械の改良に振向けられる限り、どこでも起り得ることで、平穏無事な時代のあらゆる国民においてしかり、慎重で倹約な政府を持たない国民もまたその例外ではなかったのである。従ってここでもとりわけイギリスが問題というわけではない。どの社会にも起り得ることとして考えている。また彼は進展の度がきわめて漸進的であったという。

従って産業家のもとで起った事態がとりわけ彼の念頭にあったというわけではない。そればかりか、新しい事態が、彼の議論のなかで、阻止さるべきものと考えられている場合があった。どういう場合か。そのための論拠としては、次の点が指摘できるのではないか。

彼の生きた時代には企業精神が旺盛な発動をみた。かくて新しい製造業が設立され、とりわけバーミンガムは活況を呈した。このことは疑いない。しかしスミスによれば、新しい製造業は、その製品に対する需要が流行や嗜好によって影響されるため、長期にわた

り存続することができない。従って一種の投機である。その計画者は普通以上の利潤を収むべく振舞う。そして実際にきわめて大きな利益を得たこともあった。しかしこれと反対の場合も起り、むしろ反対の場合が予期の如くなる場合よりも多い。しかも彼によれば、その計画の成功した場合には、利潤は通例当初においてきわめて高率であるが、その事業が完全に確立され、かつ一般に熟知されるようになれば、利潤は競争のため減少し、ついに他の事業の水準におちいってしまう。スミスは、企業精神の効果について信用しない。第一編第十章の記述は、その最後の成功にすべてをかける人々に対する警告の記述でもあったといっていい。

旺盛な企業欲はスミスにおいて混乱を持込むものであった。彼にはその面だけが妙に印象にのこった。従って阻止さるべきものとみなされた。企業精神の発動に彼は不安なものを感ずる。しかしスミスにおいて、実際を反映しない記述は、それだけに限らない。これと関連しては、次の点が指摘されていい。

新しい製造業を起すための資本がどこから調達されるかをめぐって、スミスは、かかる資本が企業の利潤から得られると論じている。しかし当時すでに、企業とは無関係の資本所有者から財政的援助を得ていたことが、経済史の側から例証されている。産業家は資本を他から仰いだ。従ってこの部分の記述に関しても、スミスのいうところは、産業家を念頭においてのことではなかったのである。

産業家を締出しての記述は、単にそこばかりではない。次の点が

もっと重要であるとして指摘される必要がある。

毛織物製造に使用される機械は、スミスによれば、重要な三つの改良を受けた。その三大改良とは、糸車を用いることによって、同一量の労働により三倍以上の作業を完成することができたこと、第二には、糸をまいたり縦糸と横糸を調整したりするため、きわめて巧妙な機械が使用されることによって、作業が極度に容易化されたこと、第三に漂布機が使用されるようになって、水中で踏む苦労がなくなったことであった。ところでスミスは、毛織物工業に多大の影響を及ぼしたこの三大発明が、無意識のうちになされ、その時期がはっきりしないといっている。スミスにとって発明は、知らず知らずのうちに普及をみるもので、何か特別な画期というものを彼は念頭におかなかった。優秀な発明によって工業組織の全体が一挙にくつがえされるということを、彼は考えないのである。しかし現実に発明というものは、多くの失敗を重ね、かなりの資本を消耗して後に達せられるもので、そのよき成果を信じて遂行され、決して投機的なものではない。彼の生きた時代の発明は、かかるものとして把握さるべきもので、スミスの理解とは大きなへだたりがあった。スミスのいうような発明ばかりではすでになかったのである。

技術が問題であるとすれば、運河の建設技術の驚異的な進歩にこそ注目すべきであった。スミスが国富論を書上げた当時、すでに建設技術はかなり進歩していた。にもかかわらず、運河の問題に関連して、スミスはこの点について考えない。むしろスミスは、航行可能な運河が、良好な道路・橋梁・港湾と同様、商業一般を容易にする有益な土木工事であるとみた。しかしその建設費が国家歳入から支出されることに彼は不満であった。彼によれば、建設費は、土木工事そのものに要した支出を回収するに足るだけの通行税の徴集によってまかなわれなければならないのである。彼は問題をそうすりかえた。従って彼にとっては有料道路が特別の関心事となる。運河は考察からはずされた。ヨーロッパで唯一の運河はラングドックのそれで、通行税によりその維持が実際になされているというのが最大の理由であった。第五編の第一章をみよ。

スミスをもって工業主義の代弁者といわない最大の理由は、産業家をめぐる問題に対して示したスミスのそのような態度のうちにあった。従来はそう考えられた。しかしスミスのこの態度をただちにそこに結びつけていいものか。彼が、農業に次いで製造業に投資することの重要性をいっていることを考えれば、あまりに軽卒ではないか。産業家がスミスの議論から締出されたことは明白である。しかしだからといって、これはスミスが産業家に対して憎悪の念を抱いていた直接の証拠にはならないのではないか。スミスにおいては商人や親方製造業者のことが関心事で、産業家は従の存在であった。スミスは、産業家がいまだ決定的な力にまで成長していないとの認識に立っていた。発展段階をそう把握したことが、スミスにおいて、産業家をめぐる問題が議論から締出される結果となったのではないか。彼の時代は商人や親方製造業者の時代で、利潤の拡大が独占に頼られていた。スミスがどれほどこのことに敵意を感じたことか。打破すべきは独占であった。スミスが自由を主張したのは実にそのためである。自由が徹底し、技術の改良に発展のすべてをかけるほかない社会層の出現を彼は待望した。スミスにおいて産業家は未来の存在であり、議論に組込むべくいまだそれほど強力ではなかったのである。スミスにとり工業主義は究極の目標であり、さしあたっては、その成功のための前提段階として、独占の破棄が叫ばれたのであった。

三

スミスにおいて産業家が議論から締出されたのは、産業家に対するスミスの憎悪からではない。独占に対する忿懣が大きく、産業家をめぐる問題は一時だけ議論の片隅に追いやられたと解すべきであろう。スミスにとっては、商人・親方製造業者の独占にすべてをかける態度こそが問題であった。

だからといってスミスは、商業に資本の向うことを恐れない。むしろ、商業に投入された資本は、農業または製造業に投下されている二つの全然別個の資本を回転し、農業または製造業に資本の投下を継続せしめるものとして歓迎した。彼の極度にきらったことは、もっとも遠い運送業に資本が投下されることであった。しかしイギリスには現にそのことが起っており、スミスの心配にもかかわらず、この面へ投入される資本の量はますます増大していく傾向にあっ

た。スミスは彼の生きた時代を、そのようなものとして把握した。農業を避け、製造業をきらい、商業を避けて、資本がそこに殺到している現実は、彼をいたく憤慨させた。土地や労働の年々の生産物を増加するどころではない。それでは資本の投下される意味がない。従ってかかる現実はどうしても除かれなければならない。

ところでスミスによれば、そこでは、利潤拡大の手段として、独占が唯一の方法であった。しかもこの独占には法的保護が加えられており、大量の資本を吸引するに足る安全性があった。かくて資本の偏在が起る。しかも偏在した資本が、そこにおいて、資本の投下される意味をいささかも持たないとなれば、恐るべきはこの状態であり、またそれを制度にまで固めようとする動きであった。

従って彼にとり除かるべきものがあるとすれば、この動きであり、それを助長しようとする商人や親方製造業者であった。その存在がどれほど経済の進歩を妨害したことか。彼のこの階層に対する憎悪は、それだけに熾烈をきわめることとなった。

スミスが国富論を書いた動機を求めるとすれば、実に商人や親方製造業者に対する憎悪にあった。従ってこの人々を排除することが、スミスの念願であった。そしてこの悲願成就のためスミスは独占に反対し、自由を叫んだ。そしてこれにより技術の改良に発展のすべてをかける段階の到来を待望する。従ってスミスは工業主義を否定するのではない。この段階を迎えるべく、独占は阻止条件としてあまりに強力な存在であり、それだけにスミスにあっては商人・親方製造業者に関心が集中せざるを得なかったというにすぎないのである。

（渡邊國廣）

経済学関係文献目録

（昭和三十四年十月刊）

経済理論・思想・学説史

＊経済を動かすもの〈岩波新書〉都留重人著　B40　一九四頁　一〇〇円（岩波書店）

＊マルクス経済学〈原典経済学3〉近代経済学研究会編　A5　二七一頁　二九〇円（富士書店）

＊人民資本主義入門　D・G・クーソーラス著　小原敬士監訳　B40　一七一頁　一八〇円（鏡浦書房）

＊マルクス経済学の方法　向坂逸郎著　B6　一五六頁　二〇〇円（岩波書店）

＊経済学教科書　4　改訂第三版〈合同新書〉ソ連邦科学院経済学研究所編　経済学教科書研究会訳　B40　二六一頁　一八〇円（合同出版社）

＊国民所得論　山田雄三著　A5　三五七頁　六五〇円（岩波書店）

＊現代厚生経済学　生活水準の分析〈経済教室6〉鈴木諒一著　B6　二九〇頁　四〇〇円（至誠堂）

＊賃労働と資本　賃金・価格および利潤　カール・マルクス著　宮川実訳　B6　二五八頁　一六〇円（新興出版社）

＊Kenneth E. Boulding; Principles of Economic Policy　A5　四四〇頁　七五〇円（丸善KK）

統計・数学

＊統計の理論　3　確率・信頼率・誤差の相互関係　ランスロット・ボグベン著　馬場吉行、平田重行訳　A5　五五一頁　四三〇円（青木書店）

経済史・社会史・政治史

＊日本の歴史　8　士・農・工・商　岡田章雄、豊田武、和歌森太郎編　A5　三一四頁　三九〇円（読売新聞社）

＊庄園解体過程の研究〈東大人文科学研究叢書〉杉山博著　A5　二五二頁　四五〇円（東京大学出版会）

＊明治史研究叢書　第二期5　明治維新と農業問題　明治史料研究連絡会編　B6　二七七頁　二五〇円（御茶の水書房）

＊ソ連邦共産党史　4　エヌ・イワーノフ、エム・ギルグーリン編　ソ連政治経済研究会訳　B40　一九三頁　一五〇円（現代社）

＊中国共産党の十年――その実態と展望――　鄭竹園著　江南香訳　B6　二六六頁　二五〇円（日本外政学会）

＊真説日本歴史　6　下剋上の世の中　桑田忠親著　A5　三五二頁　三八〇円（雄山閣）

＊神功皇后〈人物叢書〉岡本堅次著　B40　一七五頁　一四〇円（吉川弘文堂）

＊蒙古襲来〈日本歴史新書〉竜粛著　B6　二〇八頁　二二〇円（至文堂）

＊明治維新史研究講座　6　歴史学研究会編　A5　三五三頁　四五〇円（平凡社）

＊昭和史　新版〈岩波新書〉遠山茂樹、今井清一、藤原彰編著　B40　三一六頁　一三〇円（岩波書店）

＊日本渡航記　フレガート「パルラダ」号より〈岩波文庫〉ゴンチャロフ著　井上満訳　A5　四〇四頁　一六〇円（岩波書店）

＊宗教と資本主義の興隆　下――歴史的研究――〈岩波文庫〉トーニー著　出口勇蔵、越智武臣訳　A6　三五四頁　一二〇円（岩波書店）

＊大阪町人論　宮本又次著　B6　三〇五頁　三八〇円（ミネルヴァ書房）

＊世界史大系　4　ギリシャとローマ　誠文